

国指定史跡 骨寺村莊園遺跡

平成26年度調査概要



平成 27 年 3 月
一関市教育委員会

はじめに

一関市巖美町本寺地区は、中尊寺に残される『陸奥国骨寺村絵図』の現地として著名であり、「日本の原風景」ともいえる農村景観を今に伝えています。平安時代以来、中尊寺の荘園であったことが、中尊寺の古文書群や鎌倉幕府が編纂した歴史書『吾妻鏡』によって証明されています。平成17年に国史跡「骨寺村荘園遺跡」に指定され、平成18年には「一関本寺の農村景観」として国の重要文化的景観に選定されています。市教育委員会では平成25年度から、重要文化的景観の追加選定にも取り組んでおり、本年1月26日には新たに6.7haが文部科学大臣告示されたところでもあります。

さて、骨寺村荘園遺跡と深い関係にある「平泉」は、平成23年6月に世界文化遺産に登録されました。世界遺産への拡張登録を目指している「骨寺村荘園遺跡」については、平成24年度に世界遺産暫定一覧表に登載され、教育委員会では重点的に調査研究に取り組んでいるところでもあります。

本年度は、昨年度から継続して白山社及び駒形根神社と梅木田遺跡の確認調査を実施しました。白山社及び駒形根神社では、大規模な土地造成と建物跡、池跡、塚群が発見され、その発掘調査を実施しています。梅木田遺跡では、掘立柱建物跡や溝、沢等が発見されています。

本書により、これらの調査成果を広く公開することにより市民並びに全国の方々にも、当市の文化財を知って頂き、関心が高まることを期待しています。また、地域のルーツを紐解いていくことが、より良い地域づくりの一助になれば望外の喜びです。結びになりますが、調査に際しては地権者、地域住民のみならずはじめ多くの方々のご協力を頂きました。衷心より感謝を申し上げます。

一関市教育委員会

教育長 小菅正晴

例言

1. 本書は、平成26年度に一関市教育委員会（生涯学習文化課）が実施した骨寺村荘園遺跡に係る調査の概要報告書です
2. 本書は、一関市教育委員会（生涯学習文化課）が執筆・編集しました
3. 出土した遺物は、一関市教育委員会が保管しています
4. 表紙は、白山社及び駒形根神社（中川6地点）で発見された池状遺構の全景写真です

中尊寺と骨寺村



国指定重要文化財『陸奥国骨寺村絵図』（複製）原典は中尊寺蔵

平安時代末期、自在房蓮光^{じざいぼうれんこう}という僧侶は藤原清衡^{ふじわらのきよひら}の命令により紺紙金銀字交書一切経^{いっさいきょう}を完成させました。その功績により、中尊寺経蔵の別当^{べつどう}（責任者）に命じられ、蓮光^{れんこう}は自分の領地であった“骨寺村”を中尊寺経蔵に寄進^{きしん}（寄付）しました。こうして中尊寺領としての骨寺村は出発します。

中尊寺には、鎌倉時代後期の『陸奥国骨寺村絵図』2枚が残されています。この絵図は当時の本寺地区を描いたもので、中世の農村景観を伝える大変貴重な史料です。

絵図は、鎌倉時代後期に中尊寺と、奥州藤原氏の滅亡後にこの地を支配した葛西氏との所領争いにおける裁判の証拠書類と考えられています。左側の絵図は、農家や田圃、川や道路が詳らかに描かれており“詳細絵図”と呼ばれています。それに対し右側の絵図は“簡略絵図”と呼ばれ、村を取り巻く山々がダイナミックに描かれています。

また鎌倉幕府が編纂した歴史書『吾妻鏡』にも「骨寺」が登場します。源氏と藤原氏との合戦であった奥州合戦が終わった後、中尊寺僧心蓮^{しんれん}が頼朝に対し寺の領地を安堵（保障）してくださいとお願いに行きました。すると頼朝は、その場で骨寺（東は鎰懸^{かぎかけ}、西は山王窟^{さんのおのいわや}、南は磐井川^{みたけどう}、北は峰山堂の馬坂^{まさか}）を寺領として認めました。この際に示された骨寺村の範囲が絵図に描かれ、さらに四至（村境）は現在も地名や遺跡として残されています。

はくさんしゃ こまがたねじんじや
白山社及び駒形根神社の調査（中川4・6地点）

この調査地点は、平成25年度から継続して調査を実施し、礎石建物や掘立柱建物を確認しています。中川6地点で注目されるのは、池状遺構が確認されたことです。

池状遺構は平面的な発掘調査を実施し、池のほぼ全体像を把握することができました（表紙写真）。池は長軸約5.5m、短軸約3.2mの南北方向の楕円形で、南西方向の山裾から延びる取水路と北東方向へ流れる排水路がついています。池底は約40cmの整地を行っており、汀（池の縁）には拳大から人頭大の礫が埋め込まれています。水深は約30cmで、浅い池であったことが判明しました。また、この池は、建物遺構がある平場の造成と計画性をもって構築されていることがわかりました。

中川4地点では、昨年度確認された約30基の塚のうち、2基の発掘調査を実施しています。発掘調査の結果、塚は直径約4m、高さは約80cmであることがわかりました。この塚が造られた年代は、科学分析の結果、13世紀と推定されます。塚の中央には、何かを埋納するための穴（主体部）が掘られていました。中央部の穴の埋土を土壌分析した結果、燃やされた植物の種子等が発見されています。土壌の成分からは、この穴に動物遺体が埋葬された可能性は低く、骨片なども発見されていないことから、墓である可能性は低いといえます。

分析の結果から、塚は鎌倉時代後半に燃やされた植物種子が埋納されたものであることが判明し、約30基の塚群は、奥州藤原氏の時代から鎌倉時代にかけて、造り続けられたものと推定しています。

この遺跡では、建物と池、それから塚がセットとなることが想定されます。ただし、建物の規模や構造については、さらなる調査が必要です。今後とも継続した調査を実施していきます。



池状遺構の全景写真

中央の楕円形の白線が池、奥の溝が取水路、手前の溝が排水路です。池には山からの絞り水が溜められたことがわかります。



池底の状況

池底には拳大の礫が敷き詰められていました。中央の調査用に掘削したトレンチでは、池底に約40cmの整地がなされていることが確認されました。



中川14地点の塚7の全景写真 断面観察用のトレンチ調査と、約1/4の平面調査を実施しました。



塚主体部の検出状況

塚の中央で検出しました。赤線で囲った範囲が主体部です。



塚主体部の完掘状況

塚の中央に直径約70cm深さ約50cmの穴を確認しました。



塚主体部から出土した炭化種子類

主体部の埋土を分析した結果、炭化した種子類が多数発見されました。樹種が判明した9点の内、半数がウルシ属のものでした。主体部に焼けた痕跡は認められないことから、外部で焼かれた種子類が、塚に埋納されたものと考えられます。今後、同様の遺跡との比較検討が重要になります。

梅木田遺跡の調査

この調査地点では、昨年度から継続した調査で、多くの柱穴や溝、自然の沢の跡などが発見されています。平成25年度と平成26年度の調査を併せて検討することにより、江戸時代の建物や溝を検出することができ、それらは4時期にわたる変遷を推定できました。

近世1期とした江戸時代中期の建物はL字の溝に囲まれた小型の掘立柱建物です。L字の溝からは、現在の佐賀県で生産された肥前焼^{ひぜんやき}の陶器皿^{とうきさら}が出土しています。近世2期とした大型の建物は、L字の溝で囲まれ、前面に目隠しの柵が付けられます。ここまでは、山裾とほぼ平行に建物が配置されています。近世3期とした建物は、これまでの建物と約30度向きを変えて造られており、土地利用の変化が想定されます。小型の建物の背面に溝があり、前面に柵が設けられています。その後には、小規模の掘立柱建物2棟が造られています。

これらの建物遺構は、江戸時代の古文書に記される「梅木屋敷」(安政7年(西暦1860年)野火証文^{のびしやもん}※)との関わりが想定され、今後検討の必要があります。

平成26年度調査区の西半分では、自然の沢が発見されました。この沢は最大幅約10m、最大深度は約2mです。柱穴などの遺構は分布しないことから、沢が埋まった後も大雨や融雪時は小川となっていたのかもしれませんが。

さて、梅木田遺跡では、江戸時代の建物配置や変遷は推定できました。平成25年度調査で鎌倉時代の中国産青磁が出土していますが、奥州藤原氏の時代や鎌倉時代の遺構は、依然として不鮮明です。今回、建物として想定できなかった柱穴の中に、これらの時代のものが含まれている可能性があり、さらなる調査が必要です。

※菊池勇夫2014「安政7年の野火証文―御山・御林・里山の野火禁止―」『平成25年度骨寺村荘園遺跡村落調査研究報告会資料』



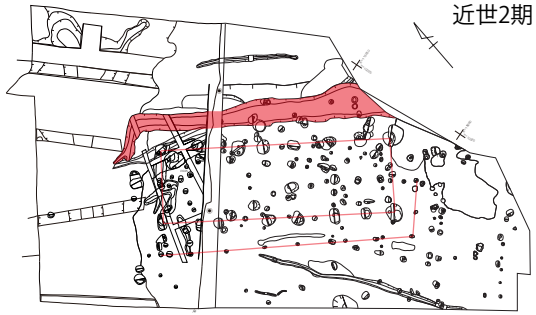
梅木田遺跡全景写真 オレンジ色の地面に建物遺構が広がります。黒色の部分は沢です。



近世1期



溝の遺物出土状況（近世1期）
L字の溝から肥前焼の陶器皿が出土しました。



近世2期



沢の調査状況
沢の最大幅は約10m、最大深度約2mでした。

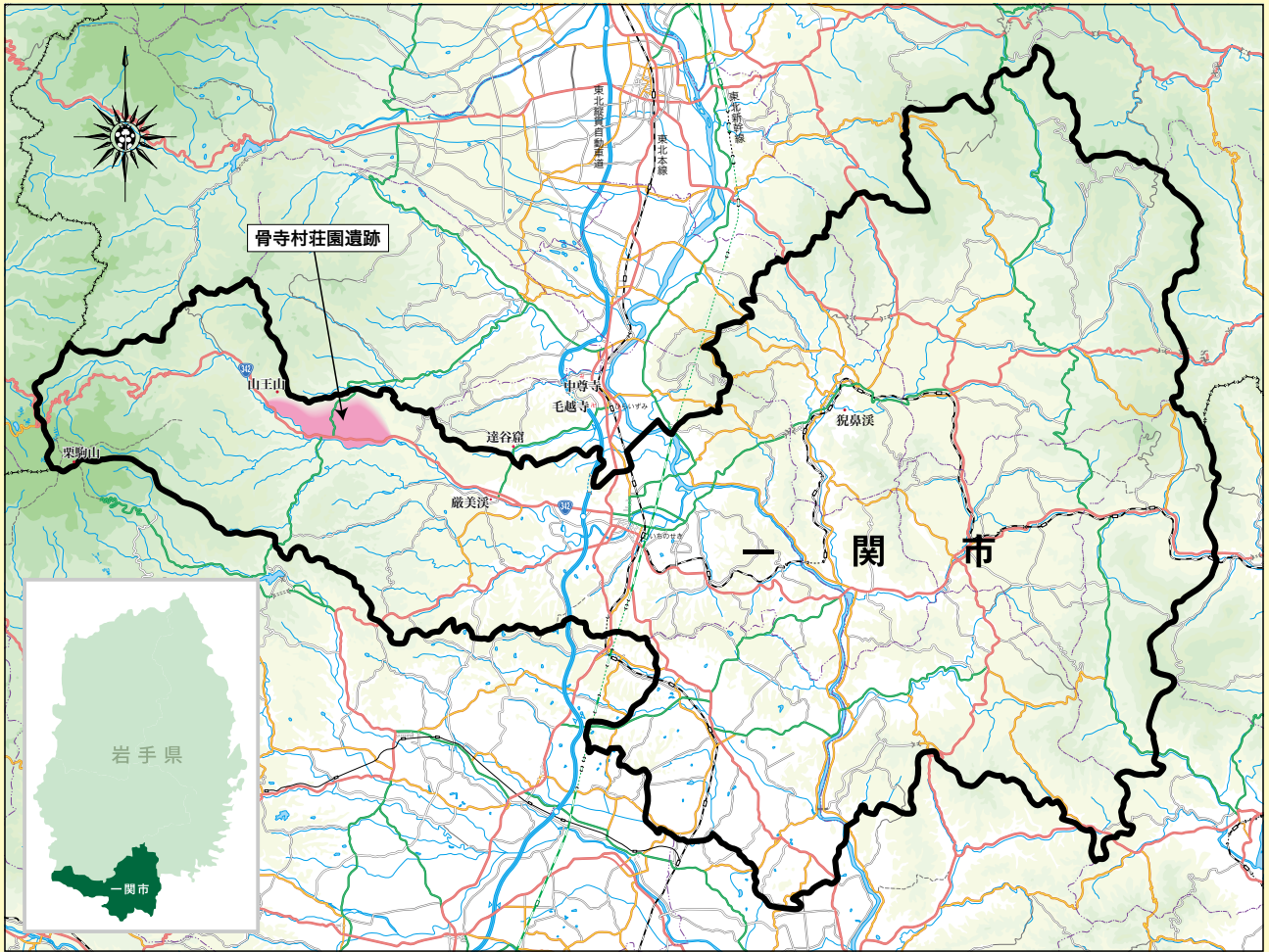


近世3期

梅木田遺跡近世遺構変遷図



骨寺村荘園遺跡指定範囲図



骨寺村荘園遺跡位置図

国指定史跡 骨寺村荘園遺跡
— 平成26年度調査概要 —

【編集・発行】 一関市教育委員会
岩手県一関市竹山町7-5

【印刷】 川嶋印刷株式会社
岩手県西磐井郡平泉町平泉字佐野原21
平成27年3月